

セイントガールティアナ

絶望に消えた

正義の光

体験版

R18
ADULT ONLY

18歳未満の閲覧禁止



文章作品



暴力・猟奇表現あり



性表現なし

小説: bz
挿絵: 地獄王子



**※この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係ありません。**

メインキャラクター紹介

名前:ティアナ

〔セイントガール・ティアナ〕

身長:158cm～39m〔最大〕

体重:48kg～8千t〔最大〕

年齢:18歳〔地球人換算〕

出身:パレリス星

所属:銀河警備隊



敵キャラクター紹介①

名前:メルド星人

別名:悪虐宇宙人

身長:185cm～48m

体重:90kg～2万t

出身:メルド星



敵キャラクター紹介②

名前:ガドラ

別名:獐猛怪獣

身長:62m

体重:5万6千t

出身:すくい山 箕久井山



敵キャラクター紹介③

名前:デニューガ

別名:甲殻怪獣

身長:57m

体重:4万5千t

出身:^{すくい}箕久井山



セイントガールティアナ

絶望に消えた正義の光

体験版

目次

第一章 聖なる光の使者

8P

第一章 聖なる光の使者

太陽系第三惑星・地球。

『銀河のエメラルド』とも称されるこの惑星において、進化の過程で最も高い知力を得るに至った動物である人間は、これまでに数多くの『文明』を築き上げてきた。

現代の地球において定義される『文明』とは、天を貫くような高層ビルであったり、時速180 kmを上回る速度で線路を駆ける高速鉄道であったり、昼夜を問わずに社会基盤を支えるハイウェイであったりと、多種多様だ。

時の流れの中で人々の繁栄と成長を見守るはずであった存在は、その全てが、変わり果てた姿となっていた。

空から地を見下ろすビル群は、一棟残らず根本から倒されている。

物流の要となる高速道路は叩き折られ、無数のアスファルト片になって地面にばら撒かれている。

大型の豪華客船は、その天変地異とも呼べる災害に巻き込まれ、大海原からこの市街地まで弾き飛ばされた。

建ち並んでいた家屋は、住まう人々の思い出と共に軒並み踏み潰され、原型すら留めていない。

至る所から黒煙が上がり、火災や爆発が空を焼く。

青空は、太陽は、その光を人々にもたらすことはない。

命の痕跡が、跡形もなく消滅した市街地。

人々の努力を、熱意を、感情を、瞬く間に塵へと還す存在。

——怪獣。

怪獣とは、『怪異性国家特別指定害獣』を略したもので、地球上に生息する『動物』のカテゴリを逸脱した、巨大生物の総称である。

“それ”はある日突然、人類の前に現れた。

喻えるならば、現代に蘇った恐竜。

あるいは、異常成長した昆虫。

はたまた、現実世界に現れた空想。

鬼。妖怪。悪魔。魔物。

伝承や伝説として語り継がれているそれらも、かつての地球に現れた『怪獣』だったのかも知れない。

平均身長45メートル。平均体重2万トン。無論この数値を大幅に超える個体も、数知れず存在している。

地中から、海から、空から、宇宙から。はたまた、異次元から。

人や家畜の肉を食うため。ガスや電気などのエネルギーに誘引されて。侵略者の手先として。本能的な破

壊衝動に駆られて。

それぞれがそれぞれの目的を持って、この地球に攻め込んでくる。

大地を踏み荒し、海を穢し、空を汚し、おおよそ命と呼べるものの全てを見境なく食い潰す。

理性も、心もない。対話による解決など、図れるはずもない。

まさしく常識を遙かに超えた、怪異の害獣だ。

規格外の巨軀と能力を誇る怪獣にとって、立ちほだかる人類など何の脅威にもなり得ない。

連射されるミサイルも、礫をぶつけられるが如く。

鉄をも容易に灼き切るレーザーを浴びようと、薄皮一枚さえ剥がれない。

善悪の分別すらつかぬ幼児が、無邪気に蟻の巣を穿り返すが如く。

悪意と本能にのみ突き動かされ、快楽が溢れるままに弱者を蹂躪するが如く。

繰り広げられる残虐な行為の中に、果たして意志が介在しているかなど、人類には推し量りようもない。

巨腕による殴打は、鉄筋とコンクリートで固められたビルでさえ、一発のパンチで容易く粉碎する。分厚い皮膚は車や橋を踏み潰しても、一切の痛痒をも感じさせない。

ただただ、破壊という結果を残すのみだ。

怪獣の足下で、途切れることなく響き続けるは、人々の断末魔。命が潰える、今際の叫びだ。

逃れようと抗い、それでも奪われる弱き者達の悲鳴。

耳を塞ぎたくなるような絶望の叫声も、怪獣達にとっては心地の良いメロディに早変わりする。

前触れなく平穏を奪われ、地獄と化したここは、エリア³⁶。昼夜問わず人々で賑わう都市部としても有名なこのエリアにて、二体の怪獣が我が物顔で暴れ回っていた。

ずんぐりとした、筋肉質の体型。褪せた灰色の体表には、ワニやトカゲなどの爬虫類同様、硬質の皮骨板が一切の隙間なく全身を覆い尽くしている。

密度の高い筋肉で構成された太い四肢は、それだけで相対する者を威圧する。

しかし、怪獣は単なる巨大な爬虫類ではない。

怪獣と呼称される所以。特筆すべきは、その姿形である。

異常に発達した肉体は、後ろ肢のみでの自立を可能にした。

つまり、相対的に自由となった前肢が即ち武器と化したのだ。最早前肢は自重を支え、移動するために存在するものではなく、立派な『腕』としての機能を果たしているのだ。

この極太の腕から放たれるパンチの破壊力は、残骸の山と化したビル群が証明している。

大きく裂けた口。乱杭状に生えた牙は決して鋭くないものの、噛みつくには必要十分。肉を食いちぎる程度ならば造作もないとばかりに、腐臭に塗れ粘ついた涎を滴らせる。

発達した四肢と同じく、二足歩行を可能にすべく独自に進化した、身長と同等にまで伸びた長い尻尾。勢いを乗せて振ったのならば、たちまち驚異的な武器に変貌しよう。

場違いなまでに爛々と光る相貌。怒りなのか快樂なのか、血走ったそれは次なる獲物を探している様子でもあった。

身長48メートル。体重2万8千トン。

破壊し尽くした市街地で咆哮を響かせるのは、灰鱗怪獣ラブリザだ。

この怪獣は数万年もの間、エリア36の地下で眠りについていただけだが、長きに渡る人間の活動によって目を覚まし、暴れ出した。

ラブリザの横で共鳴するかのように喉を震わせる、もう一体の怪獣。

筋骨隆々とした体軀から伸びる、太い手足。紅く光る目が、この怪獣の凶暴性を際立たせている。

その外見は、ラブリザと同一の個体……あるいは、亜種とも呼べるだろう。大きな差異は見られない。

強いてラブリザとの違いを挙げるとするならば、体表を覆う皮甲板の色が、より白みがかっていることであろう。

一般的に、凶暴な怪獣同士が遭遇すると、自分の縄張りや獲物を横取りされる危惧から、途端に争いを始めることも少なくない。

だが、その様子も見られないばかりか、協力し合うような仕草を見せることから、この怪獣とラブリザの関係は、人間に喩えるならば親子や兄弟といった極めて近いものと推察される。

白鱗怪獣ジーマ。身長46メートル、体重2万6千トンを誇る、ラブリザの同族怪獣である。

二体の怪獣は、この市街地を巨大な遊技場に見立てているかのように、尚も視界に入ったビルをなぎ倒したり、鉄道を踏み潰したりと、破壊の限りを尽くしている。

数刻前までは、雲一つない快晴だった青い空。怪獣達の破壊活動によって立ち込める黒煙に覆われ、鮮やかな青色から闇夜のような黒い世界を作り上げる。

怪獣によって奪われた青空を、大地を、再び取り戻すべく。

黒雲を切って滑空する、防衛軍の戦闘機。

パイロットは自分が持てる力の全てを振り絞り、巨悪に挑みかかる。

表皮に着弾したレーザーやミサイルは、化学反応による爆発を見せるが、しかし怪獣の進撃は止まらない。鋼鉄の数百倍の硬さを誇る怪獣の外皮は、この程度の攻撃に痛痒を感じることはない。

むしろそれは、怪獣達の怒りを逆撫でする行為に他ならなかった。

破壊を楽しんでいたラブザとジーマの視線が、揃って空を飛ぶ戦闘機に向く。

邪魔をするならば、思い知らせてやらねばならない。

ラブザがビルの屋上を掴んで筆り取ると、戦闘機に向かって投げつけた。

即席の投擲武器は、果たして戦闘機に命中。爆破炎上した。

原始的な外見に反して高い知能を誇るこの怪獣は、高速で飛行する戦闘機を殲滅せんと行動を開始した。先の成功体験から、ラブザは再び瓦礫を投擲する。

豪腕から放たれるコンクリート塊は、散弾銃のように空中で細かく分解。立ち向かうとしていた戦闘機を蜂の巣にして撃墜させた。

一方のジーマも負けてはいない。ラブザよりも小柄だが、その分俊敏性に長けたこの怪獣は、恐るべきスピードで戦闘機に肉薄。

超進化の果てに得た両脚のバネは瞬発力だけでなく、数十メートルのジャンプをも可能にする。

人間の反応速度を、せせら笑う一撃。

巨大な爪が、突如としてフロントガラスに迫る。鉢合わせした機体を、硬質ケラチンの刃が深々と切り裂いた。

人々の期待を背負って飛び立った戦闘機は、一瞬にして鉄の棺桶へと変わり果てた。

編隊飛行で攻撃を加えていた戦闘機も、二体の怪獣の前に全滅。

唸りを上げるエンジン音も、耳を劈くような風を切る音も、何もかもが消え失せて。

崩壊した市街地に、残酷な静寂が訪れる。

規格外の災害に対して、地球人は——あまりにも無力であった。空を飛んでいた小さな鉄塊も、潰してしまえばそれまでだ。

怪獣はすぐに興味を逸らし、再び破壊活動にいそしんでいた。

さりとて、ここ一帯は全て“狩り”尽くした。

瓦礫を踏んで砂に変えても、さして面白いとは思えない。

ならば、どうするべきか。

答えは決まっている。

より楽しめて。

より面白く。

より沢山の破壊を堪能出来て。

より悲鳴が聞ける場所を。

新天地を求め、揃って踵を返したラブザとジーマ。

誰にも、怪獣の侵攻を食い止めることは適わないのか。

虐げられし者達の祈りは、届かないのか。

——否。

地球には、人類には。

唯一無二となる、『希望』があった。

黒ずんだ空を割って顕現する、聖なる光。

それは、巨大なる少女の肉体を形作った。

降り積もったばかりの新雪と見紛う程に滑らかで瑞々しい、純白の肌。その真白い肌を彩るは、目が覚め

るような赤色の幾何学模様。

手入れの行き届いた桜色のショートヘア。その髪 of 美しさを際立たせるかの如く、銀色に輝く髪飾りが装着されている。このカチューシャは『セイント・サークレット』と呼ばれ、“彼女”が所属する平和維持組織『銀河警備隊』の一員であることの証明でもあった。

研磨された宝玉を思わせる桃色の瞳は、柔和で穏やかな本来の姿とはかけ離れ、今は険しい表情を以て怪獣を見据えている。

アイドル顔負けの相貌は、顔面を構成するパーツの全てが完璧な配置に収まっており、“彼女”を一目見た者は誰もが『美少女』と形容するだろう。

なだらかな曲線を描く肩から伸びる腕は細く、指に至ってはガラス細工の如き儚ささえ覚える程の繊細さだ。

小ぶりながらも形の整ったバストを、余計な肉や脂肪が一切見られないくびれたウェストが引き立たせる。華奢な上半身に対して、下半身は『ポリュミー』の一言に尽きた。張りに満ちた瑞々しい尻肉に加え、細いながらもムツチリとした太ももは最早官能的とすら言えよう。

鍛え抜かれ引き締まった美しい脚。膝下から足先までを、肌の色に負けない程に白いブーツが保護する。胸の中央には、鮮やかなエメラルド色の鉱石『セイント・クリスタル』が燦然と輝いている。このクリスタルこそ、彼女の力の源であり、戦うために必要となる光エネルギーの貯蔵庫である。

この地球から遠く遠く離れた惑星『パレリス』から単身派遣された、若き女戦士。強く、優しく、頼もしく。

どんなに凶悪で恐ろしい怪獣や侵略者を相手にしても、絶対的な勝利を収めてきた、正義のヒロイン。“彼女”を、地球人は敬愛を込めてこのように呼ぶ。

“聖なる光の使者” “セイントガール”と。

少女の名は、ティアナ。

人智を超越した巨大なる怪獣や侵略者、破壊兵器の侵攻から地球を守るべく遣わされた、正義の使者である。

体内に流れる光エネルギーを消費することで巨大化し、怪獣達に立ち向かう。

「く……ッ」

怪獣達によって、無惨にも破壊された都市部。

つい先刻までは確かに存在していた人々の声は、もう聞こえない。

どれだけ急いでも、どれだけ祈っても、どれだけ戦っても。

決して届かない——救えない命があることに、ティアナはいつも苦しんでいた。

だが、悲しみに涙を落とす時間はない。

ここで怪獣を倒さねば、より沢山の人々の命が危険に晒される。それだけは、絶対に避けなければならない。

「……ッ！」

ティアナは怪獣達に向き直ると、両拳を握り締めて顔の前にまで持ち上げ、僅かに開いた脚に力を込めた。

彼女が取ったこの構えは、銀河警備隊に所属する戦士ならば誰もが最初に会得する、ファイティングポーズだ。

素早い攻撃や防御に移行出来る姿勢であることは勿論、巨大なる怪獣や異星人と対峙する際に生じる不安や焦り、怒りの感情などを鎮める他、相手への威嚇効果もあるため、戦闘時には必ずこの構えを用いる。

二体の怪獣の注意が、突如として現れた巨大なヒロインに向く。

野生の本能か。ラブザやジーマはすぐに襲いかかるような真似はせず、喉を鳴らして唸りながらも、相手を強く警戒しているようだ。

「……」

対するティアナも、ファイティングポーズを崩さぬまま、怪獣の様子をつぶさに観察していた。

迂闊に飛び出すことは、決して得策ではない。

多種多様な怪獣と、長きに渡って戦い続けてきたティアナ。どの怪獣も強く、恐るべき能力を有していた。目の前で唸り声を上げているラブザやジーマも、決して油断の出来ない相手だ。

突然光線を放ってくるかもしれない。

突然姿を消すかもしれない。

突然超スピードで迫ってくるかもしれない。

将棋において数百先の手を想定する棋士の如く、ありとあらゆる可能性が、ティアナの脳内で巡っていく。

「く……ッ」

敵は二体。どちらも自分よりも遙かに大柄な、ヘビー級の怪獣だ。

ティアナには巨大化の能力がある。だが、身長は最大39メートル、体重も8千トンが上限で、決してこの数字を上回ることはない。

対する白鱗怪獣ジーマは身長46メートル、体重2万6千トンを誇り、更に巨大な灰鱗怪獣ラブザに至っては身長48メートル、体重2万8千トンである。

身長も、体重も、体格も、筋肉量も。

何もかもが、屈強なる怪獣と比較すれば遙かに劣るセイントガールだが。

それでも、平和を愛する想いと、地球を守る使命感を支えにして、強大なる悪に立ち向かうのだ。

——心を蝕む恐怖を、押さえ込みながら。

「……………ッ！」

じりじりと間合いを測るティアナを睨みながら、それぞれ動きを見せるラブザとジーマ。

(まづい……)

左右に動く二体の目的は、即ち挟み撃ちだ。

数で有利ならば、定石とも言える戦法。この怪獣達もその例に洩れず、前後からの挟撃によってティアナを叩きのめそうとしていた。

怪獣は互いに目配せをしながら、敵の隙を窺う。

これ以上の移動を許せば、いよいよ怪獣達に挟み込まれてしまう。

「くッ！」

敵に背を向ける行為に、何のメリットも生じないことは、ティアナは当然理解していた。

「……ふうう……ッ」

息を吐き、覚悟を決める。これより始まるのは、文字通り……生命の奪い合いだ。

視線による罅迫り合いは、この瞬間肉体のぶつかり合いへと変貌した。

「——たあああああああああああッ!!」

ティアナが、叫びながら駆ける。

自らを鼓舞するように。恐怖に屈せぬように。

狙うは、向かって右側。灰鱗怪獣ラブザだ。

「っはぁッ！」

跳躍と共に美しいフォームでのジャンプキックを、ラブザの鼻先に見舞う。

不意打ちを受けた怪獣は、痛みに叫びながら後退する。

「はッ！ たぁッ！」

着地と同時に懐へと潜り込んだティアナは、矢継ぎ早の連打を浴びせかけた。

「やッ！ だッ！ はぁッ！」

柔らかな腹部に、鋭いパンチが乱れ飛ぶ。

彼女が得意とする戦法。それはスピードを活かした連続攻撃である。

怪獣に比べてあまりにも華奢で非力なティアナは、その欠点を手数で補っているのだ。がら空きになった腹部に息をつかせぬラッシュを受けたラブザは、涎を吐きながら蹈躡を踏んだ。

「はッ！　せいッ！」

ラブザに組み付くや否や、ダメージを与えた腹に今度は連続して膝蹴りを叩き込む。

見る者によつては破廉恥だとすら感じる、ティアナの肢体。

彼女の見せる激しい動きに連動して、肉厚のヒップが扇情的に揺れる。

その美しさや艶めかしさを際立たせるは、怪獣という醜い存在だ。

「はッ！　ぜあッ！」

自分よりも巨大な怪獣を相手にしても、ティアナは果敢に挑みかかる。

その勇気こそが地球人に信頼される証左であり、彼女が“セイントガール”と呼ばれる所以でもあった。

「はあッ！　セッ！　だあッ！」

ドブッ！　ドボッ！　ドスッ！

市街地に絶えることなく轟く鈍く痛々しい音が、怪獣の受けたダメージの大きさを物語る。

「ったああッ!!」

ふらつくラブザに、駄目押しのアップパーカットが炸裂。下顎を打ち抜かれた怪獣は、いよいよ前後不覚に陥った。

グロッキーも同然の怪獣。ティアナは勝機を見出す。

（今だッ！）

右足の先に、青白い光が宿る。

「——っだああッ！」

ムチのようにしなる長い美脚は、寸分変わらず怪獣の側頭部を捉えた。

バシイッ！　刹那、爆ぜるような音が怪獣の頭部で鳴り響く。

『フラッシュ・ストライク』。体内を流れる光エネルギーを破壊エネルギーに転化して放つ、強烈な蹴り技である。

ティアナのハイキックをまともに受けたラブザは、遂に力尽きて地面へと倒れ込んだ。

(よし……！)

「はあ、はあ……ふう……ッ」

まずは一体。だが、彼女に安堵する暇はない。

相棒である白鱗怪獣ジーマが、ティアナに突進攻撃を仕掛けていたのだ。

「ッ！ はあッ！」

奇襲を察知したセイントガールは、すぐさま跳躍。持ち前のジャンプ力で、怪獣が放った体当たりを激突寸前でかわした。

捨て身のタックルを敢行したジーマは、勢い余ってアスファルトに倒れ込む。

「ったああああッ！」

今がチャンスだ。ティアナは空中で軌道を変え、うつ伏せになった怪獣の背に、膝を突き立てて飛び乗った。

背中を強く打ち付けられ、甲高い悲鳴を上げる怪獣。

「はッ！ たあッ！ やあああッ！」

ティアナの猛攻は止まらない。うつ伏せとなった怪獣の背中に跨がると、後頭部目掛けて拳を振り下ろす。ジーマの硬い皮骨板にも負けないマウントパンチ。一撃毎に、鱗が火花を散らしながら削り取られていく。

「たッ！ やッ！ はあッ！」

鬼気迫る表情で、パンチの雨を降らせるティアナ。

端正な顔には、流れる汗に混じって焦燥の色が浮かび上がる。

「くうッ！ っだあああッ!!」

二対一の状況にも拘わらず、圧倒的優位に立っているはずの彼女が焦る理由。それは、この地球という『環境』にあった。

パレリス星人であるティアナが巨大化を行う際、体内の光エネルギーを大量に消費する。

喩え雲一つない晴天下であっても、太陽から得られるエネルギー量が、巨大化によって消費するエネルギー量を上回することは決してない。

そして今は、その太陽さえもが黒煙によって覆い隠されている。

このような環境での戦いは、ティアナの体力を著しく消耗させてしまうのだ。

「だッ！ はあッ！ つく……はあ、はあ……ッ！」

高い防御力を誇る怪獣にダメージを与えるためには、パワーを底上げた攻撃が必要となる。その際に用いられるのが、光エネルギーなのだ。

無論、防御や回復にも、光エネルギーは必要不可欠だ。

怪獣の激しい攻撃から身を守り、反撃に転じるために、ティアナは貴重なエネルギーを消費して戦っている。

つまり、巨大化の維持には勿論のこと、攻撃や防御、果ては自身の回復にさえもエネルギーを湯水の如く消費するティアナは、常に重すぎるハンディキャップを背負って戦っているようなものなのだ。

「はう……つくあッ！ だッ！ はあ、はあ……つうあああッ!!」

エネルギーの消耗は、ティアナの肉体に様々な悪影響を及ぼす。

第一に、倦怠感。時間経過と共に身体から力が抜け、消耗の度合いによっては立つことすらままならなくなる。

「はあ、はあ……つく……つたッ！ うう……ッ」

第二に、頭痛と吐き気が訪れる。疾病に苛まれたかのような熱と鈍痛が、ティアナから集中力を削ぎ落とす。

力の伝わらない手で殴ったところで、怪獣には通用しない。

堅牢な鱗を削り取る程のパワーだったパンチも、エネルギーの消耗に伴って威力が格段に減少。今ではどれだけ力を込めようとも、反響する音はカツツ、カツツ、と虚しささえ覚える軽いものであった。

「はあ、はあ……はあ……はあッ、はあッ」

息が上がり、動悸が起こる。

心臓が早鐘を打ち、一刻も早く身体を休ませよと指示を出す。

されるがままだったジーマも、ティアナの異変に気付く。どうやら、コイツは疲れ始めているようだ……と。

ならば、臂力に勝るこちらにも、チャンスはある。

——反撃開始だ。

「んッ!?……くッ! うううッ!」

立ち上がろうとするジーマを、疲弊した両腕を伸ばして必死に押さえ込む。

「く……ッ! やッ! たッ! たあッ!」

華奢な両脚で胴を挟み込み、頭部にチョップの連打を見舞った。

ダメージを与えた箇所への追い打ちに、ジーマも堪らず苦悶の声を上げる。だが、エネルギーが不足したティアナの攻撃もまた、それまでとは比べものにならない程弱々しいものであった。

「ッ……くッ!」

ティアナの奮闘も虚しく、怪獣の前肢はしっかりと地面を掴んだ。

このまま怪獣が立ち上がることを許してしまえば、戦況はたちまち不利になる。ティアナは怪獣の背中にしがみつくようにして体重をかけ、細い腕を首に回すと、ありったけの力で絞めつけた。

「んっぐッ! ぐぐぐ……んうううッ!」

だが、2万6千トンの体重を、巨大ヒロインとは言えど僅か8千トンの少女が制圧出来るはずもなく。

「うあ……あ……ッ！」

遂にジーマは、四つん這いの姿勢にまで自分の身体を持ち上げた。

「く……ッ！　ぐううッ！」

それでも、セイントガールは決して諦めない。諦めてはいけない。

これ以上の被害を出さないためにも……この怪獣は、ここで食い止めなければ。

「うあ……あ……ッ！」

鬱陶しいとばかりに激しく頭を振るうジーマ。絡みつけていた腕が、容易く振り解かれる。

「く……ッ！」

首絞めを諦め、ダメージを与えた後頭部へのパンチを再度試みるティアナだったが。

「……はッ!?——ッ!？」

拳を握った矢先。その矮躯が、突然吹き飛ばされた。

「あが……ッ!!　つはあああ……ッ！」

細い身体はまさしく撥ね飛ばされ、原型を失った地面に背中を強打した。

「げほッ!　ごほッ!　ごほッ、ごほッ！」

背中に走る痛みに顔を顰め、肺に詰まった空気を咳き込みながら吐き出す。

一体、何が起こったのだ。

飛びかけた意識を取り戻し、砕けた地面を掴む。

身体を、起こさなければ……。

「——ッ!？」

ティアナはどうか瓦礫を退けて半身を起こすと、目の前に広がる光景に言葉を失った。

「そ……………んな……………ッ!？」

思わず、絶望の声が零れ落ちる。

疲労困憊したティアナを睨み付けるのは、白鱗怪獣ジーマと……………そして、もう一体。

灰鱗怪獣ラブザがいた。

ラブザは、ティアナの必殺キック『フラッシュ・ストライク』では倒れない程のタフネスを誇っていた。

「はあ、はあ……………はあ……………はあ……………ッ」

息を荒げながらも立ち上がり、ファイティングポーズで威嚇を続けるティアナだが。

その心は、絶望の黒い雲に覆われ始めていた。

「う……………はあ、はあ……………くう……………ッ」

戦況が、振り出しに戻った。

否、悪化した。

相手によっては決着の一撃ともなる『フラッシュ・ストライク』を耐え抜いたラブザ。

一心不乱に打ち続けた渾身のマウントパンチを、全て凌ぎきったジーマ。

「う、あ……………ッ」

想定を遙かに上回る防御力とスタミナを有する二大怪獣が、同時に自分を睨み付ける。

その鋭くも残酷な四つの眼光に、ティアナは思わず後ずさった。

構えを取るも、その指先は僅かだが震えている。

足使いも、最初に見せたような力強さは感じられない。

本能に生きる怪獣は、少女が発する感情の機微にも敏感であった。

コイツは、疲れ始めているだけではない。

明確に……………自分達を恐れている。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………ッ」

負の感情——特に『恐れ』は冷静な判断力を、咄嗟の決断力を奪うことを、怪獣達は熟知していた。それは、ティアナも同様であった。

怪獣との戦闘は、矢継ぎ早に現れる幾つもの選択肢の中から、瞬時に正解を選び取る作業とも言える。正解を選ぶことは必須事項であり、一つでも不正解を選んでしまえば、すぐさま大きなペナルティを与えられてしまう。

この場合のペナルティとは大きなダメージやピンチであり、積み重ねた先に待つものは——即ち“死”だ。恐怖や焦りは不要な選択肢を増やすだけでなく、瞬間的に選ばなければならぬ正解さえも曇らせてしまう。

故に“冷静”は、戦闘中であれば何を捨て置いてでも残さなければならない重要な要素である。

だからこそ、ティアナは如何なる状況に置かれようと冷静であるような訓練所で教わっており、自身もそうあるよう努めていた。

だが、彼女が積み上げてきた努力など『本物の恐怖』を前にすれば、無意味に等しい行為だ。

「うあ……ッ!!」

背を屈めたかと思えば、次の瞬間には飛び出している。

怪獣が先天的に会得した瞬発力と運動神経は、必死の思いで鍛えてきた少女を嘲笑う。

「っが……ッ!？」

2万6千トンの、体当たり。

ジーマの電光石火は、身構えることすらままならないセイントガールの身体を弾き飛ばした。

「がはああああッ!!」

吹き飛ばされた先。崩落したビルに背中を叩き付けられたティアナは、反動から吐血する。

「げほッ! ごほ……ごほおッ!」

白鱗怪獣のタックルで受けたダメージは骨だけに留まらず、臓器にまで達していた。

「ごほッ！ がふッ！ げふうッ！」

倒れたまま脇腹を押さえ、血の咳を吐き続ける巨大ヒロイン。

「はあ、はあ……………は、あ……………あぐッ!？」

立ち上がろうと身を振ると、途端に脇腹が痛む。

(骨、が…………ツ)

震える指先で、患部に触れる。

…………辛うじて、折れてはいないようだ。

だが、体当たりをまともに受けた肋骨には幾つもの亀裂が入り、呼吸をするだけでも耐え難い激痛が走った。

「うぐ…………ぐ…………あうう……………ッ」

ズキズキと痛む腹部。全身から、脂汗が滲み出る。

セイントガール・ティアナの弱点は、戦闘時の激しいエネルギー消耗だけではない。

もう一つの弱点。それは『防御力』である。

彼女の長所と呼べる小柄であるが故の身軽さと手数は、言い換えれば華奢で非力……………そして打たれ弱いという短所でもある。

強靱な肉体と無尽蔵のスタミナを誇る怪獣を相手に、体格やパワーが劣るティアナが対等に戦うためには、『速効の決着』と『ヒットアンドアウェイ』。この二つの戦法を取らざるを得ない。

蝶のように舞い、蜂のように刺す。一見すれば優雅で気品溢れる戦い方ではあるが、しかしそれは表面上の話である。

現実として彼女が行っている戦法は、消耗し続けるエネルギーや体力に気を配りながら、迫り来る攻撃の一切を避けつつ微量のダメージを重ねるようにして与え続けるという、極めて非効率的で難度の高いものだ。対して怪獣が行う基本的な攻撃パターンは、フィジカルにものを言わせた押し of 戦法であることが多い。

つまるところ、どれだけ攻撃を受けようともその全てを耐え抜いて殴り殺してしまえば良い、という考え方だ。

圧倒的に足りないパワーと防御をスピードと手数で補うティアナと、愚鈍ながらも持ち前の防御力と有り余る怪力を武器にする怪獣。

水と油の如く、相容れない戦法同士がぶつかり合う。

果たしてどちらが有利で、どちらが不利か。

喻え防御に優れているようが、スピードに長けているようが、許容量を逸脱したダメージを受ければ死ぬ。本来ならば、早急な結論など出るはずもない比較だ。

しかしティアナには、『光エネルギー』という絶対的な枷がある。

消耗による体力の低下や体調の変化は、すぐさま重荷となつて彼女の身体にのし掛る。

激しい死闘の最中であるうが、関係ない。

立ちくらみ、目眩、頭痛、吐き気、倦怠感。

それら全てが、ティアナから頼みの綱とも呼べる機動力を、体力を、容赦無く奪い去っていく。

この無情なる枷が、均衡を破り。

怪獣との戦闘を、不利に働かせる。

「う……ぐ、くうう……ッ！」

あまりにも残酷すぎる前提の上で、彼女は華奢で非力なヒロインなのだ。

たったの一撃でも相手の攻撃を受けてしまえば、戦況はたちまちひっくり返る。

どれだけダメージを与えていようと、途端に不利を背負うこととなる。

そうならないように、彼女は立ち回ってきた。

常に周囲に警戒し、どんな攻撃が来ても対処出来るよう神経を集中させていた。

しかし、それにも限界はある。

ありとあらゆる怪獣と戦い抜いてきたティアナとて、二体の強敵を相手取りながら戦いにおける全ての情報を拾い上げて処理することなど、現実的には不可能だ。

事実、ラブザに見舞った『フラッシュ・ストライク』が決定打になったかどうかの確認も、ジーマヘマウントパンチを浴びせかけている間の警戒も、彼女は出来なかった。

一つの綻びが、やがて大きな穴となるように。

ティアナもまた、気が付いた頃には怪獣を倒せぬままに大きなピンチを背負っていた。

「ぐ……ッ！」

だが、目の前の光景に落胆している時間も、自身が置かれた戦況に絶望している余裕もない。

胸の中央で輝いていたエメラルドグリーンの鉱石『セイント・クリスタル』の光も、陰りを見せている。

彼女に残されたエネルギーは、50%を切った。

もう、時間がない。

「はあ、はあ……はあ、はあ……ッ！」

ティアナは覚束ない足取りで立ち上がり、再度のファイティングポーズを取る。

それが最早虚仮威しの威嚇行為でしかないことは、怪獣達にも見抜かれていたのだが。

これまでやられた分、たっぷりと仕返しをしてやろう。

「うあッ!？」

突然、ジーマが大きく跳躍する。

不意を突かれたティアナは対応に遅れ、背後を取ることを許してしまった。

「ッ!? しま——ッ」

『しまった』と、思わず零す。

前門の虎、後門の狼。この諺よろしく、ティアナはラブザとジーマに挟まれてしまったのだ。

疲弊した巨大ヒロインを獲物と見定めた二大怪獣は、じりじりと間合いを詰めていく。

「あ……ああ……くうッ」

にじり寄る怪獣に、構えを作りながら視線だけを激しく移動させるティアナ。どちらから来る……？ それとも、同時に……!!

「う……く……ッ」

(ダメ……動けない……ッ！)

迂闊に動いた瞬間、背後から痛烈な一撃を受けてしまうことは容易に想像がつく。だが……このまま動かなければ、怪獣達の餌食となってしまう。

それだけではない。

「はあ、はあ……はあ、はあ……」

ティアナの生命線とも呼べる光エネルギーは、この間にも消費されていく。

エネルギーもいよいよ半分以上を消耗し、クリスタルが微弱な明滅を始めている。

彼女に残された時間は、あと僅かだ。

「く……ッ！」

危険を承知の上で、こちらから仕掛けるしかない。

この絶望的な状況を打破するためにも、まずは一体を着実に倒さなければ。

ティアナはラブザに挑みかかるべく、足先に力を込めたのだが。

怪獣の動体視力は、彼女が見せたその僅かな動きさえも見逃さなかった。

「うあ——あッ!」

時間にして、コンマ数秒。ティアナが前方へと駆け出す直前、ラブザが巨体を活かした突進攻撃を仕掛けてきたのだ。

「うあぐうッ!!」

同じくラブザ目掛けて攻撃を仕掛けようとしていたティアナは避けることも適わず、突如肉薄してきた巨

軀を真っ直ぐ受け止める形となってしまった。

スピードと体重を乗せて放つ、ラブザの体当たり。その破壊力は、推定5万トン。高層ビルも一撃で粉碎するパワーだ。

「んぐぐ……ぐぐ、ぐうう……ッ！」

咄嗟の判断で両手にエネルギーを収束したことで、押し潰されることだけは回避出来た。

——だが。

「うぐ……うぐああ……ッ!？」

押し返そうと下半身に力を入れると、途端に傷付いた脇腹が痛み出す。

ティアナの苦悶は、大きな隙を呼び寄せる。

その隙に割って入るのは、当然……この怪獣だ。

「ぐぶ……ッ!？」

背後からの痛みに、思わず目を見開く。

ジーマの急襲が、ティアナの背中に直撃した。

「っは……がはッ！」

ラブザの身体を掴んでいた手も、反動で離れてしまう。

そうなれば、待ち受けているものは。

「——おごッ!? ぶばはああッ!？」

中断させられた攻撃を、再開するまでだ。

薄い腹を、細い腰を、儂い背中を。

合計して6万トン近い重量による残酷なプレス機が、前後からティアナを押し潰した。

怪獣の頭を妖しく濡らすのは、吐き出された鮮血の塊であった。

「あぐ……ぶッ! ぶぼッ!」

圧倒的な臂力と体重に潰された身体は、至る所から破壊の音を響かせながら少女に命の危機を知らせる。
「ぐえあ……ッがッ！ あ……ッがああ……ッ!!」

一刻も早くこの圧殺処刑から逃れようと身を振るが、一度起動したプレス機は止まらない。

「ッはッ！ ぶッ！ ごぶッ！ つぶうう……ッ！」

むしろティアナという存在の一切をすり潰そうと、より体重をかけて押し潰しにかかる。

「ッがッ！ はッ……あ……あ……ッ」

怪獣が身動きを取る度に、ささくれ立った硬い鱗がティアナの柔らかな肌を切り裂いていく。

「はッ、はッ、はッ……うぐ……ぐああ……ッ」

小さな呼吸を繰り返すティアナの身体を中心に、血の臭いが立ち込める。

その臭いが、怪獣を一層に興奮させた。

もっと。もっとだ。

もっとコイツを、甚振ってやれ。

邪悪なる意志は互いに通じ合い、原始的な欲求を満たすべく最適な行動を選択する。

「……………あう……………」

その、第一歩。

ラブザとジーマが、抱き合う程に密着させていた身体を突如として離す。

支えを失ったヒロインは、全身を血みどろに汚しながら力なく倒れ伏した。

「はあ……………はあ……………ッ」

崩壊した市街地の中央。うつ伏せに倒れたまま立ち上がる様子を見せない、满身創痕の巨大ヒロイン。

新雪の如き純白さを誇っていた背中や腰は痣と裂傷のタトゥーで彩られ、呼吸に合わせて微かに揺れる肉感的な尻肉や張りに満ちた太もも、対照的に細い脰に至るまでが怪獣の鱗によってズタズタに切り裂かれている。

「……はあ、はあ……はあ……はう……あうう……ッ」

挟撃によって彼女が受けたダメージは、甚大であった。

体内に流れるエネルギーがすぐさま止血を施すが、その自己治癒によっても更にエネルギーが消費されていく。

彼女の体内に残された光エネルギーはもう、40%程度にまで落ち込んでいた。

「う……ぐ……」

(立たなきゃ……立ち上がら、なきゃ……)

ダメージを、負いすぎた。痛みと失血で朦朧とする意識の中で立ち上がろうとするが、焦点が定まらない。震える指先には力が伝わらず、地面を掴むこともままならない。

「……あ……ッ」

対する二大怪獣は、ティアナが流した血の臭いを嗅いだことで、いよいよ残虐な本性を露わにする。肩で息をしながら、それでも四つん這いになった巨大ヒロインを、白鱗怪獣が背後から掴み上げた。

「うあ……あ……あが……ッ!?」

ボロボロの身体を無理矢理に引き立たせられ、羽交い締めにかかる。

眼前には、興奮醒めやらぬといった様子のラブザが立っている。

唸り声を上げながら牙を剥き出しにしてこちらを睨むラブザに、果たして“何をされる”かを察知したティアナは、残された力を振り絞って暴れる。

「——ッ!? んッ! ぐ……んぐう……う……あ……かああ……ッ」

無論その抵抗もジーマにすぐさま察知され、太い両腕で傷だらけの上半身を締め上げられてしまう。

「っはあッ、はあッ、んぐッ! ぐッ!……あ……」

必死に抗うティアナの、目の前で。

灰鱗怪獣が、『拳』を固く握り締める。

四足歩行から二足歩行へと進化を遂げた末に体得した、『前肢』による攻撃を……哀れな獲物に打ち付けようとしていた。

「あ……あ………ッ」

ラブザは、ティアナの身体で狙うべき場所を既に決めていた。

“同じ場所”に攻撃を受けてきたこれまでの恨みも、介在していたかも知れない。

凝縮した岩石を彷彿とさせる、硬く握った拳を。

その一点に、爆発させた。

「——ッ!!」

ズムッ！ 重い音が、青黒く染まった腹の中で響き渡る。

「……ぶッ！」

無意識にもきゅっと閉じた口。その隙間から、濁った唾液が飛び出した。

「……………ッ!!」

羽交い締めにされたことで、衝撃やダメージをいなす術もなく。

目を見開いたまま身体は硬直し、一方で四肢の先端だけが激しく痙攣を始める。

胃腸が蠕動し、中に留まっていた体液が各々逃げ道を探して動き回る。

「んッ……ぐ………ッ！」

口の端からは、プシュッ、プシュッ、と粘ついた体液が断続的に噴き出している。

反射的に口元を両手で押さえるも、登り詰めた汚液は関係無いとばかりに指の隙間からも溢れ出た。

「ぶッ！ んぶうッ！」

胃の中に溜まっていた体液が、殴り潰されたことでせり上がり、喉を焼きながら口元まで迫っていたのだ。怒濤の勢いで流れ来る自身の胃液が、意志とは無関係にその小さな口をこじ開けた瞬間。

「——んぶばああああッ!」

ティアナは自らの腹の中で混ぜ合わせた血と胃液のカクテルを、口から、鼻の穴から、盛大に吐き戻した。鯁えた臭いを放つ汚液が、灰鱗に覆われた怪獣の顔や身体を濡らした。

悲鳴が、浴びた体液の温度が、臭いが。

彼女の見せた反応全てが、ラブザとジーマを悦ばせた。

「——おぶッ!?……つぶふああ……ッ!」

もう一発。解れきった腹部に、残酷なるブローが飛ぶ。

全身の痙攣と共に血飛沫が舞い、ティアナの命が削られていることを端的に示唆する。

「んぐッ! つごぶあッ!……がはああッ!」

ドゴッ! ドブッ! ドボンッ!

かつて彼女がそうしたように、ラブザの拳が幾度となくティアナの腹を打ち据えた。

何度も。何度も。

「ぐぶえ………つご……おお……ッ」

ボゴッ! ドグッ! ボグウッ!

執拗な腹部への殴打の果て。ティアナは蒼い顔で反吐を撒き散らすだけのサンドバッグと化していた。

「つがは……あ、あ……おぐええ………ッ」

怪獣のパンチがティアナを屠る度、悲鳴は弱く、呼吸は小さくなっていく。

どうにか振り解こうとジーマの腕を掴んでいた両手もいつの間にか垂れ落ち、ラブザの殴打に合わせて揺れるばかり。

「………お……ッ! つぶお……お……ッ」

暴虐に次ぐ暴虐で、いよいよ目立った反応を見せなくなったティアナ。

死んだか？ ラブザが攻撃の手を止め、ぐつたりと項垂れるティアナを見やる。

「……………う……………う……………」

呼吸は今にも消えてしまいそうだが、まだ生きてはいるようだ。

「……………ん……………ぐッ!!」

失いかけていた意識は、強烈な吐き気によって呼び戻された。

「んぐぶッ！　ぐえッ！……………えッ！　げええええッ!!」

黒ずんだ血の泡が、吐瀉物と共に吐き出される。

細い脚をガクガクと震わせながら、嘔吐を繰り返すティアナ。反撃の兆しなど、見られるはずもない。

「ごぶえ……………おえええ……………ッ！　げッ！　ぐえええッ！」

そうなれば、怪獣達も俄然に調子が付く。弱った獲物を更に甚振ろうと、ラブザが拳を振り上げた。

「げぶッ！　げほッ！——うあぶッ!?　ぶはあああッ！」

ティアナの横頬を打ち抜く、強烈なパンチ。

あまりにも強い衝撃に桃色のショートヘアが大きく揺れ、口からは血と唾液の飛沫が舞う。

「つぶあ……………あ……………ぶッ、ぷぱああ……………ッ」

ダメージは顔面だけに留まらず、頸椎にまで及んだ。

鼻血を噴き出しながら、ぐつたりと項垂れる死に体のヒロイン。

だが、苛烈なる暴力は依然として終わらない。

ここからが本番だと、言わんばかりに。

「うぶッ！　ぶうふうう……………ッ」

痛みに絶叫する時間さえも与えられぬまま、二撃目が飛んだ。

女性の命とも呼べる顔に対して、怪獣は容赦などするはずもなく。

ラブザの硬い拳による殴打が、ひたすらに続く。

「えぶおツ！ ごツ！……ぼお……ッ！」

臉を腫らし、頬骨が砕かれ、鼻筋を潰されて。

ティアナの美貌が、見る見るうちに崩されていく。

「う、あ……あう……あう……ッ」

鼻から、口から。

赤黒い血を滴らせ、ぐったりと項垂れる。

血と汗と吐瀉物で汚れた胸元で、それでも輝いていたクリスタルの点滅がにわかに早くなる。それは、彼女に残されたエネルギーが残り僅かであることを示していた。

「……………ッ」

ジーマの腕の中でピクリとも動かぬ彼女は、まるで壊れた玩具だ。

そして怪獣達は、その壊れた玩具を直す術を「叩く」以外には知らなかった。

「……ぶっふお……ッ」

試しに顔を軽く殴ってみるが、血を吹き出すだけで悲鳴すら上がらない。まったく、面白くもない。さて、どうするか。

3万トン近い巨体を動かすにはあまりにも頼りないサイズの頭脳をフル回転させて、灰鱗怪獣はこの死にかけと長く遊ぶ方法を模索していた。

全身を硬い鱗でズタズタに裂かれた上に、上半身に至っては殴打の嵐で痣だらけだ。

思案の中、太陽が隠れた曇天の中でも光を放つ緑の鉱石が目に入った。

先程から気にはなっていたが、このチカチカと光る石は一体何だ？

興味が湧けば、すかさず行動に移す。目に付いたものなら何でも構わず口に入れる乳児のように。

成体となっても思考能力に成長のないラブザは、文字通り単純な怪獣であった。その単純さが、ティアナにとっての不幸を呼び寄せる。

「——ッ!？」

上から下へ。怪獣の硬い拳が叩き付けた先。

そこには、エネルギー増幅鉱石『セイント・クリスタル』があった。

「——ひiiiiiiiiiiiiiiiiッ!？」

顔を殴られても反応を見せなかったティアナが、一転して絹を裂くような絶叫を響かせる。

「つぎiiiiiiiiッ! ひぎうううううッ!？」

痣と血で汚れた相貌を歪め、胸元を押さえて悶絶する。

彼女が幼子のように泣き喚き、悲鳴を上げる理由。それは、パレリス星人の巨大化プロセスにあった。

ティアナを始めとするパレリス星人は、巨大化をする際このクリスタルを胸に押し付ける。そうすることで、クリスタルの中に蓄えられた光エネルギーを自身の体内に強制的に巡らせ、身体サイズを大幅に増大させる。

巨大化に伴い、クリスタルは肉体と融合。エネルギーの貯蔵庫と循環器の役割を兼任する。

端的に表現するならば、パレリス星人にとっての『第二の心臓』となるのだ。

——つまり。

彼女は今、剥き出しとなった心臓に攻撃を受けたのである。

無論、怪獣との戦闘においては光線や打撃に晒される危険が伴うため、普段は肉眼では見えないバリアが展開。あらゆる外部ダメージからクリスタルを保護している。

だが、その保護膜もエネルギーの消耗によって耐久力が低下する。

現在ティアナに残されたエネルギーは、僅かに30%。
この状態での保護膜など、あつてないようなものだ。

「つひいいいいいッ！——いいいいいいいッ!？」

ジーマの腕の中で身をくねらせ、痙攣しながら泡を吹くティアナ。

これ程までのリアクションを見せられたならば、どれだけ愚鈍な怪獣であつても“そこ”が泣き所だと理解出来よう。

「はーッ、はーッ、はーッ……ッ！ あああ……ッ！」

怪獣の視線から、狙いを察したティアナ。

浅い呼吸と共に、両手で胸元のクリスタルを庇う。

消え入る寸前の命を守るべく添えられた、ブルブルと震える白い小さな手が、怪獣の嗜虐心を逆撫でさせる。

「——あはぐッ！ つぐうあああああッ!？」

そんな防御など、ラブザには関係無い。

手の甲を叩き潰さんばかりのパンチが、骨を軋ませた。

「ひぐッ！ いううッ！」

潰す。砕く。破壊する。

明確なる殺意を乗せた拳が、ティアナの手の甲に集中して浴びせかけられる。

「っは……あッ……かッ、あ……ッ」

もしも、巨大化したパレリス星人が戦闘中に『セイント・クリスタル』を破壊されてしまったら。

彼らはもう二度と、立ち上がることが出来なくなる。

そして今、まさにその“もしも”が現実のものになろうとしていた。

「……あ………」

黒灰色の巨大な腕を、目一杯に振りかぶるラブザ。
この一撃で、クリスタルを叩き潰すつものようだ。

「……………ッ！」

刹那。

星を護る戦士として戦い続けてきた経験と、最後まで諦めない精神力によって研ぎ澄まされた感覚が、極限状態の下で覚醒する。

それは、彼女にとって千載一遇の……そして最後のチャンスでもあった。

「はあ、はあ、はあ、はあッ」

ティアナは最後の力を振り絞り、一か八かの賭けに出た。

怪獣が、腕を大きく振りかぶる。

（今ッ！）

「……………つあああああああああッ!!」

ありったけの力で暴れたティアナが、遂にジーマの拘束を振り解いたのだ。

自由を得られた少女は、即座に真横へと転がり込む。

ラブザが爆裂の勢いで放ったパンチは、間一髪でティアナの脇腹をすり抜けると、相棒であるジーマの腹部を打ち抜いた。

渾身の力で殴り飛ばされた白鱗怪獣は、複数のビルをなぎ倒してダウンする。

「はあッ、はあッ、はあッ、はあッ」

泡を吹きながら四肢を痙攣させるジーマと、あろうことか仲間を殴ってしまったことで呆然とするラブザ。

彼女の賭けは、見事に成功した。

絶体絶命の危機に陥ったティアナが感じた『チャンス』。それは、ジーマの油断と慢心であった。

攻撃を受け続けて死にかけている獲物を、しっかりと抱え込む必要もあるまい。

自分達の勝利を確信して、油断しきっていたジーマ。

自身を抱える腕の力が緩んだことに気付いたティアナは、ラブザとの同士討ちを狙ったのだ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……く、う……ううッ」

全身が痛い。少しでも気を抜けば、そのまま意識を失ってしまいそうだ。

だが、この機を逃してしまえば、もう勝利を掴むことは出来ない。

この星を——護り抜くことは出来ない。

「うッ……ん………っぐッ！ んぐぐ……ッ！」

エネルギーの枯渇で重くなった身体を引き起こし、ティアナは立ち上がった。

怪獣達の動揺は、ティアナに攻撃のチャンスを与えていた。

「……はああああああ……ッ！」

ティアナの両手に、光が集う。

怪獣殲滅の要^{かなめ}でもある、エネルギーの収束だ。

左右の手に集まった光を重ね合わせ、巨大な一つの光を形成。

純粹な破壊エネルギーは、やがて彼女の手の中で更なる進化を遂げた。

「——っやあああああッ!!」

噉れた喉を振り絞って叫び、収束した光を放出する。

両手を大きく開いた瞬間放たれたそれは、三日月状の光線であった。

空気を裂き、煙を断ち、炎を斬る、聖なる刃。

ラブザが気付いた時には、その肉体は両断されていた。

『シャイニング・スライサー』。収束した光エネルギーを破壊エネルギーに転化して放つ、切断に特化した光線だ。

光のギロチンによる断罪を受けた灰鱗怪獣は、今際の声を上げる間もなく絶命した。

一方、遅れて目を覚ました白鱗怪獣が見たものは、肩で息をする獲物と、身体を両断された仲間であった。ジーマは、果たして『過程』はともかくとしても『結果』がどうなったかだけは瞬時に理解した。

か弱い獲物だとばかりに思い込んでいた小さな動物は、自分達が手を出して良い存在ではなかった……と。ティアナに背を向け、走り出す。

蓄積したダメージによる、覚束ない足取りで。

「……ッ！」

ジーマの逃亡に、ティアナは一瞬だけ迷う。

戦意を喪失した怪獣を倒すことは、果たして正解なのだろうか。

……否。

彼女が所属している銀河警備隊の中でも、戦意を失った怪獣を見逃したばかりに、より大きな惨劇を呼び寄せた事例が報告されている。

傷が癒えたら、復讐に現れるだろう。

あるいは別の場所で、同様の殺戮を始めるだろう。

この街に住まう人々が見た悪夢を、再現させてしまう。

これ以上、罪のない人々を苦しめるわけにはいかない。

“優しさ”は、“甘さ”とは違うのだ。

「く……ッ」

意を決し、ティアナは再度のエネルギー収束を試みた。

「ぐ……くッ！」

ポロボロの両手に集う、正義の光。

それは、決意となって。

それは、覚悟となって。

痛みを、苦しみを、全てを乗り越えて。

——放つ。

「っだあああああああああああああッ!!」

セイントガール・ティアナが誇る、最大最強の必殺光線、『セイント・ドラグーン』だ。

一度光を両手に収束させた後、左手で右腕の肘先を掴むことでエネルギーを一つに合わせる。

凝縮した光の波動は、あらゆる悪を殲滅する裁きの龍となるのだ。

希望と正義を纏った光線は、果たしてジーマの首筋に命中。そこは、ティアナが必死の思いで繰り出していたパンチやチョップによって弱点となっていた箇所であった。

「ああああああああ……ッ! つく……つく……ッ!……うわあああああああああッ!!」

絶叫にも近い声を張り上げるティアナ。

その双眸から溢れる涙は、命を奪うことへの後悔と、罪の意識が発露したものだ。

『セイント・ドラグーン』が纏う高出力スパークと高い熱エネルギーは、怪獣の表皮に着弾すると同時に化学反応を発生させ、大爆発を引き起こす。

この光線が有する破壊力は、ダイナマイト八万トン分とも謂われている。

人智を超越した怪獣として、これだけのエネルギーを一点集中で受けてしまえば――。

ジーマの巨体は脱力し、糸が切れた人形の如く倒れ伏した。

瞳が白濁し、呼吸が止まる。

「……………はあ、はあ……………はあ……………はあ……………ッ」

訪れる、静寂。

市街地にて繰り広げられた激しい死闘は、今回も、セイントガール・ティアナの勝利で幕を下ろした。

「……………う……………く……………ッ」

立ち込める死臭に対して感じる、自分の心臓の鼓動。

この空間で生き残ったのは、自分だけ。

消え入りそうな程に弱々しい光量で、チカチカと点滅を繰り返すクリスタル。エネルギーは、僅か15%程度しか残されていなかった。

勇気と精神力で掴み取った、薄氷の勝利。これはティアナにとって、何ら珍しいことではない。

強靱な肉体を誇る怪獣や、狡猾な罠を仕掛ける侵略者との戦いに必ず勝てる保証など、どこにもない。

「つく……………う……………ッ……………ぐす……………う……………く……………ッ」

誰もいない市街地で、独り啜り泣く。

今自分が生きていることへの安堵。全身を蝕む痛み。命を脅かされたことへの恐怖。そして命を奪ってしまった罪悪感。それら感情の全てが爆発し、涙となって溢れ出ていた。

今度こそ、勝てないかもしれない。

今度こそ、守れないかもしれない。

今度こそ、殺されるかもしれない。

戦う度に、傷付く度に、倒れる度に、ティアナの脳裏には『最悪の結末』がいつもよぎっていた。

この戦いも、運良く勝てただけだ。

もしもあの賭けが、失敗に終わっていたら。

『セイント・ドラグーン』を、耐えられたら。

エネルギーが、尽きてしまったら。

彼女に待ち受ける結末は、“死”のみだ。

「ぐ……ぐずッ……」

折られた鼻を吸る。鋭い痛みと共に、ドロリとした血が舌を流れた。

頬が折れた影響で、顔は酷く腫れ上がっている。

瞼も同様に、右目は殆どが開かない。

肋骨が数本折れ、腹部は痣だらけだ。

内臓も、一部が損傷している。

両手の甲にはヒビが入り、軽く握るだけでも激痛が走る。

巨大化の維持にも、限界が近づいてきている。

一刻も早くエネルギーを補充し、傷を癒やさなければ。

「……………はッ！」

泣き止んだティアナは黒雲に覆われた空を見上げると、太陽に向かって飛び立った。

身も、心も、文字通り命をも削りながら。

それでも、セイントガール・ティアナは戦い続ける。

全ては、この星を……大切な地球を、守り抜くために。

喩えこの身が、碎け散ってしまおうとも。

